

とが、百年の葛籐を暗々裡に而も止む時なく續けて來たのがわかる。この葛籐こそ百幕にもなる劇であるが、之を塔と樹とを兩役とした無數の特殊な而も常に同趣の果合として見なければ、到底之を述べ得られないのである。其の初めは何れに於ても同様で、一粒の菩提樹の實が、或は風に送られ、或は鳥に運ばれて、棟や破風の角に溜つた僅かの塵の間に落ちれば、之が雨期に入つて發芽し生長し、其の細い根は太くなり、延びに延びて、近くの石の接目を求めて入込み、之が大きくなつては、熱帶の當るべからざる生育力で時に重い石塊をも搖がし、之を壞す事になる。已に若木が大樹となれば、數年の後には、塔は何處も彼處も怖しい蝟の足の様な根で締めつけられ、その中には三十メートルを超える程長いものもある。而して時と共に建物の頂に大樹が生ひ茂り、風は之を搖り、樹は大挺の様に建物の土臺までも動かす事も出来る様になる。之までになれば、樹も塔も運命の赴く所は一緒に、互に持ち合つて居るに他ならず、終には、共に倒れて了ふのである。而して、其の崩れる物凄い響を森の奥深く聞くのも稀ではなかつたのである。丁度我々がこ